

# 2016年度 大阪大学 前期 日本史

## (I) 日本における仏教の受容

出題範囲	古代の政治・社会・文化史
難易度	★★★☆☆
所要時間	20分
傾向と対策	第1問は、6世紀における仏教の受容過程について、特に分野などを指定せずに漠然と問うており、どの範囲で論述すればよいのか戸惑った受験生も多いことだろう。しかし、このような場合、必須の内容を落とさず、残りの部分が歴史的に正しく内容として適格的であれば評価されるはずなので、自信をもって解答を作成すればよい。また、大阪大学の日本史は論述の分量のわりに時間が短いので、必要な知識を並べそれを素早く文章化する能力が必要である。よって、自分で時間設定をしたうえで過去問を解くという対策が有効となるだろう。

### 《この解説の使い方》

**黒太字** …この試験で合格点を取るために必要な頻出語句を黒太字で記載した

**赤字** …解答に関連する語句・内容および知識としておさえておきたい内容を赤字で記載した

**青字** …この試験で合格点を取るためにおさえておきたい年号を青字で記載した

#### 解答例

6世紀半ば、百済の聖明王が欽明天皇の時代の日本に仏像や経論を献じたことで、仏教は公式に伝えられた。仏教の受容の可否をめぐる崇仏派の蘇我氏と排仏派の物部氏が対立し、崇仏論争が起こったが、587年に蘇我馬子が物部守屋を滅ぼしたことで終結した。その後、仏教は大王家や豪族を中心に受容され、国家の政策に影響を及ぼしたほか、氏寺が古墳に代わって諸豪族の権威の象徴として用いられるようになり、のちの飛鳥文化に大きな影響を与えた。(207字)

#### 設問の要求

**字数** 200字程度

**主題** 6世紀における仏教の受容過程

#### 解説

本問では、6世紀に仏教がどのように日本で受容されたかが問われている。政治や文化などさまざまな面から、なるべく時系列に沿って具体的に情報を整理したい。

### ① 仏教の伝来

仏教の公伝以前、仏教は渡来人によって私的に信仰されていた可能性がある。その例としては、継体天皇の時代に私宅で仏像を礼拝したとして『扶桑略記』に記載がある**司馬達等**などが挙げられる。しかし、このことが事実であるとは断言しがたいので、今回はあえて解答には盛りこまないようにした。

仏教の公伝は、百済の**聖明王**によって**欽明天皇**の時代になされたとされているが、具体的な年号については大きく分けて2つの説がある。1つ目は、仏教の公伝は**552年**であるとする説で、これは『日本書紀』に記載がある。もう一方は、**538年**に伝来したとする説で、こちらは『上宮聖徳法王帝説』や『元興寺縁起』に記されている。なお、現在は後者が有力視されているが、解答例ではこの点について「6世紀半ば」と記述し、どちらかの説の立場に立つことを避けた。

また、司馬達等や聖明王、欽明天皇などの語句を解答に盛り込むかどうかは、字数との兼ね合いで判断するとよい。

## ②崇仏論争

仏教が日本に伝来すると、**蘇我稲目**(?~570)を中心とする**蘇我氏**が**崇仏派**を形成し、積極的に仏教を受容しようとしたのに対し、**物部氏**は**物部尾輿**を中心に仏教排斥を唱え**排仏派**を形成し、両者は激しく対立した。この対立を**崇仏論争**という。

**587年**に**蘇我馬子**(?~587)が**物部守屋**(?~626)を滅ぼし崇仏論争に勝利したことで、蘇我氏が政治権力を握るとともに、日本国内に仏教が広まっていくこととなった。

## ③仏教の国内への影響

崇仏論争が終結したのち、仏教は大王家や豪族などを中心に信仰された。弥生時代の後期以降、豪族など各地の有力者は古墳を造営することで**各々の権威を示そう**としたが、6世紀末になると、**大王や諸豪族らは古墳の代わりに寺院を建立するようになった**。その例としては、蘇我氏による**飛鳥寺(法興寺)**や、**厩戸王(聖徳太子)**が創建したといわれる**四天王寺・法隆寺(斑鳩寺)**などが挙げられる。法隆寺をはじめ、多くの寺院の建立は7世紀以降のことなので、解答で具体的な寺院名について触れる必要はないだろう。

政治面では、6世紀末から厩戸王が蘇我馬子らとともに政治の中樞を担ったが、そこで行われた政策には、仏教思想に大きく影響されたものもあった。**604年**に制定された**憲法十七条**に「篤く**三宝**を敬へ」という条文があったことや、法隆寺が建立されたことなどはその例である。

## ④仏教文化の成立

以下の内容はおもに7世紀以降のこととなるので、補足的なことになるが日本初の仏教文化である飛鳥文化について触れておきたい。

飛鳥文化のおもな担い手は**蘇我氏**や**王族**であったが、寺院の建立や仏像の製作には多くの渡来人の技術者が携わったため、この文化は百済や**高句麗**、さらには**南北朝時代の中国**など、大陸文化の影響を多分に受けた文化となった。飛鳥文化の代表的な寺院は前述した飛鳥寺、法隆寺、四天王寺に加え厩戸王が創建した**尼寺**である**中宮寺**や、**秦氏の氏寺**である**広隆寺**などが挙げられる。また、この時期に作られた仏像には、**鞍作鳥**による**法隆寺金堂釈迦三尊像**など、**北魏様式**のものに加え、**中宮寺・広隆寺の半跏思惟像**のように**南朝様式**のものなどがあ

る。

その後も、仏教は天平文化をはじめ日本文化に大きな影響を与えることになった。

(瀧拓也, 釈迦戸雅史)

## 2016年度 大阪大学 前期 日本史

### (II) 室町幕府の東国支配と鎌倉府の展開過程

出題範囲	中世の政治史
難易度	★★☆☆☆
所要時間	20分
傾向と対策	第2問は、室町幕府の東国支配について問う問題であった。鎌倉府の特徴および展開過程については頻出テーマであり、教科書の記述も十分にあるため、受験生にとって解答しやすい問題であっただろう。しかし、京都の幕府権力との関連については想起しにくいうえに、永享の乱・享徳の乱は少々細かい知識でもあるので、このポイントをうまく書けたかどうか勝負を左右しただろう。

#### 《この解説の使い方》

**黒太字** …この試験で合格点を取るために必要な頻出語句を黒太字で記載した

**赤字** …解答に関連する語句・内容および知識としておさえておきたい内容を赤字で記載した

**青字** …この試験で合格点を取るためにおさえておきたい年号を青字で記載した

#### 解答例

足利尊氏は子の足利基氏を鎌倉公方として鎌倉府を開かせ、東国を支配させた。以降、鎌倉公方は基氏の子孫、それを補佐する関東管領は上杉氏が世襲した。鎌倉府は室町幕府とほぼ同じ機構をもち権限も大きかったため、幕府からの独立性が高く、幕府に反抗的な鎌倉公方足利持氏が足利義教に鎮圧された永享の乱などの衝突も起こった。その後、関東管領と鎌倉公方の対立を契機に享徳の乱が勃発して、鎌倉公方は古河公方と堀越公方に分裂し、関東は戦国時代に突入していった。(218字)

#### 設問の要求

**字数** 200字程度

**主題** 鎌倉府の特徴および展開過程

**条件** 京都の将軍権力との関係に留意

#### 解説

室町幕府が設置した東国支配のための機関といえば、**鎌倉府（関東府）**のことである。以下で室町将軍の権力との関連に留意しつつ鎌倉府の特徴および展開過程について説明していく。

まず、鎌倉府の特徴から説明していこう。

鎌倉府は、かつて鎌倉幕府の本拠地であった関東を重視した足利尊氏(1305~58)が自らの子**足利基氏**<sup>もとうじ</sup>(1340

～67)を鎌倉公方(関東公方)として開かせた機関である。以降、長官である鎌倉公方は基氏の子孫が引き継ぎ、長官の補佐役である関東管領は上杉氏の世襲となった。

鎌倉府の組織は評定衆・侍所・政所・問注所など室町幕府のそれとほぼ同じであり、かつ権限も大きかったため、幕府からの独立性が初めから高い機関であった。それゆえ2代鎌倉公方以降は将軍と対立するなど、幕府との衝突もしばしば起こった。

また、支配地域は当初関東8か国および伊豆・甲斐、のちに陸奥・出羽も追加されるなど、広範囲にわたるものであった。

次に、鎌倉府の展開過程について説明していこう。

前述のように、鎌倉府は幕府との衝突が多く、幕府と鎌倉府の対立の事例として教科書にとりあげられているものは結城合戦や上杉禅秀の乱など多くみられる。しかし、字数が限られているため、その中でも優先すべき事例は永享の乱と享徳の乱であろう。

永享の乱は鎌倉公方足利持氏(1398～1439)と関東管領上杉憲実(1410～66)の対立に、強圧的な政治を行う6代将軍足利義教(任 1429～41)が介入し、1438年に討伐軍を送り、幕府に反抗的な持氏を滅ぼした事件である。乱後の1440年、結城氏朝が持氏の遺子を擁して挙兵したが、上杉憲実により鎮圧された結城合戦もおさえておこう。

享徳の乱は1454年に、持氏の子足利成氏(1434?～97)が関東管領上杉憲忠(1433～54)を謀殺したことを契機として勃発した事件である。謀殺後、幕府の追討にさらされ、鎌倉を追われた成氏は下総古河に逃れて反抗を続けた。一方で、これに対抗するために、幕府は8代将軍足利義政(任 1449～73)の庶兄である足利政知(1435～91)を鎌倉公方として鎌倉に派遣したが、鎌倉諸將の不支持により鎌倉に入れなかったため、上杉氏により伊豆堀越で迎えられた。これが、鎌倉公方が堀越公方と古河公方に分裂した始まりである。これにより、関東は戦国時代に突入していくことになった。

(浦地智暉, 釈迦戸雅史)

## 2016 年度 大阪大学 前期 日本史

### (III) 元禄期の儒学刷新の動向

出題範囲	近世の文化史
難易度	★★★★☆
所要時間	20 分
傾向と対策	第 3 問は、元禄期の儒学の動向について述べる問題であった。陽明学派・古学派の特徴や関連する人物について、それらの学問が朱子学をどのように批判したのかに触れながら正しくまとめる必要があり、知識面・構成面どちらからみても難しい問題であった。このような文化史のみの論述問題が出題された場合は、人物名や著作名を列挙するだけで終わらず、設問の要求にしっかりと応えることを常に念頭に置くことよいだろう。

#### 《この解説の使い方》

**黒太字** …この試験で合格点を取るために必要な頻出語句を黒太字で記載した

**赤字** …解答に関連する語句・内容および知識としておさえておきたい内容を赤字で記載した

**青字** …この試験で合格点を取るためにおさえておきたい年号を青字で記載した

#### 解答例

幕府の教学として採用された朱子学は、大義名分論を唱え、上下の身分秩序や外面的規範を重んじた。それに対し、中江藤樹の門人の熊沢蕃山らは陽明学を学び、知行合一の立場から実践を重視して、現状を批判・改善しようとした。一方、山鹿素行・伊藤仁斎・荻生徂徠らの古学派は、朱子学も陽明学もともに後世の学者による解釈にすぎないとして批判し、経書の原典にあたって孔子・孟子の真意を直接に理解することを目指した。(196 字)

#### 設問の要求

**字数** 200 字程度

**主題** 17 世紀後半～18 世紀初期の儒学刷新の動向

**条件** 朱子学に対する根本的な批判にも留意して述べる

#### 解説

問題文では、「この儒学刷新の動向」について述べることが求められている。「この儒学刷新の動向」とは「17 世紀後半より 18 世紀初期にかけて、朱子学に対する根本的な批判がなされるようになった」を指している。よって、解答では、**朱子学の特徴や当時の状況を述べたうえで、新たに登場した学派が朱子学をどのように批判し、何を主張したかを述べればよい**。なお、ここで問われている 17 世紀後半～18 世紀初期は元禄期にあたるので、教科書の元禄文化の項を思い出しながら記述しよう。

### ①朱子学の特徴・当時の状況

朱子学は、宋代の朱熹(1130～1200)が創始した儒学一派である。理気二元論によって世界を捉え、格物致知によって聖人となることを説いた。朱子学の理念の1つとして、上下の身分秩序や外面的規範を重んじる大義名分論がある。

日本には鎌倉時代に伝わり、大義名分論は鎌倉幕府倒幕に影響を与えた。室町時代には五山の禅僧が朱子学の研究を行い、江戸時代初期の禅僧・藤原惺窩(1561～1619)は還俗して朱子学の啓蒙を行った。惺窩の門人・林羅山(1583～1657)は幕府に登用され、羅山の子孫(林家)は儒者として代々幕府に仕えた。幕府は、封建支配を維持するための理念として儒学を重視し、なかでも大義名分論をもつ朱子学を教学とした。

### ②新たに登場した学派 (1)陽明学派

陽明学は、明代の王陽明(1472～1528)が始めた儒学一派であり、知行合一を唱えて実践を重視した。知行合一とは、真の知は必ず行いを伴うものであり、知っていて行わないのは真の知ではないとする考え方である。一方、朱子学では、経書に記された聖人の教えを学んだのちにそれを実行に移すと考えられていた(知先行後)。

幕府の教学となった朱子学に対し、中江藤樹(1608～48)やその門人の熊沢蕃山(1619～91)は陽明学を学び、陽明学派を形成した。知行合一の立場を取り実践を重視する彼らは、現実社会の矛盾を批判し、それを改めようとする傾向をもっていたため、幕府に弾圧されることがあった。なお、問題で問われているのは17世紀後半～18世紀初期であり、中江藤樹が生きた時代は含まれない。そのため、厳密には「この儒学刷新の動向」として中江藤樹自身の行動を書くのは適切ではない。ただ、もし書いたとしてもおそらく減点されることはないので、あまり神経質になる必要はないだろう。

### ◆参考

#### 陽明学派の人物

##### 中江藤樹(1608～48)

日本陽明学の祖。近江に藤樹書院を開き、近江聖人とよばれた。

##### 熊沢蕃山(1619～91)

中江藤樹の門人。岡山藩主池田光政(1609～82)に仕え、花鳥教場を開いた。『大学感問』で武士土着論を説き幕政を強く批判したことにより、下総古河に幽閉され、そこで死亡した。

### ③新たに登場した学派 (2)古学派

一方、朱子学や陽明学を、朱熹や王陽明による後世の解釈に過ぎないとして批判し、経書の原典にあたることで直接に孔子・孟子の真意を理解しようとしたのが古学派である。古学派は山鹿素行(1622～85)や伊藤仁斎(1627～1705)らによって始められた。また、古学派に属する荻生徂徠(1666～1728)は、社会問題の具体的な解

決策を解く**経世論**をおこした。経世論を「儒学刷新の動向」と捉え、解答に含めてもよいが、「朱子学に対する根本的な批判」という観点からはやや外れる。よって、ここでは経世論については触れないのが適切だろう。

#### ◆参考

### 古学派の人物

#### 山鹿素行 (1622～85)

『**聖教要録**』で朱子学を批判し、孔子・孟子の古典に立ち返ることを主張したため、幕府によって**赤穂**に配流された。赤穂配流中に著した『**中朝事実**』では、当時中国で明が滅び、異民族による征服王朝である清が成立したことから、万世一系の天皇が治める日本こそが「中華」であるとの立場をとった。

#### 伊藤仁斎 (1627～1705)

子の**伊藤東涯** (1670～1736) とともに、京都に私塾**古義堂**を開いた。

#### 荻生徂徠 (1666～1728)

古典を訓読せずに中国語の発音のままで読み、成立当時の意味で解釈しようとする**古文辞学派**を創始した。その後、具体的な統治策を考える**経世論**を説き、**柳沢吉保** (1658～1714) や 8 代将軍**徳川吉宗** (任 1716～45) に政治顧問として用いられた。『**政談**』では都市の膨張抑制のための武士の土着などを主張した。江戸に私塾**護国塾**を開き、弟子の**太宰春台** (1680～1747) は『**経済録**』『**経済録拾遺**』で**経世論**を発展させた。

以上の①, ②, ③の内容をまとめて解答を作成しよう。

(金子智実, 下谷佳楠)



# 2016年度 大阪大学 前期 日本史

## (IV) 日中戦争期の経済統制

出題範囲	近代の外交史
難易度	★★★☆☆
所要時間	20分
傾向と対策	2016年の第4問は、琉球史からの出題であった。琉球に関する事項で一番重要と言っても過言ではない琉球処分 <sup>しゅきゅうしふぶん</sup> の過程を述べる問題であり、基本的な知識をもっている受験生であれば難なく書けたであろう。明治時代の外交史は論述において頻出なので、これをきっかけに琉球以外の地域も、図表を取り入れながら復習しておこう。

### 《この解説の使い方》

**黒太字** …この試験で合格点を取るために必要な頻出語句を黒太字で記載した

**赤字** …解答に関連する語句・内容および知識としておさえておきたい内容を赤字で記載した

**青字** …この試験で合格点を取るためにおさえておきたい年号を青字で記載した

#### 解答例

近世の琉球王国は島津氏に征服され、薩摩藩に支配されていた。江戸に謝恩使・慶賀使をおくりつつ、朝貢貿易は続けており、日中両属の関係にあった。明治政府は琉球を日本領にしようと試み琉球藩を設置し、琉球王であった尚泰を藩王としたが、清はこの行動を認めなかった。そこで政府は、琉球漂流民殺害事件をきっかけに台湾出兵を強行し、清に正当な行動と認めさせ、賠償金を支払わせた。後に琉球藩を廃止し、沖縄県の設置を断行した。(202字)

#### 設問の要求

**字数** 200字程度

**主題** 琉球王国・琉球処分

**条件** 江戸時代における琉球王国の存在形態を踏まえる

#### 解説

##### ①江戸時代

まずは、江戸時代における琉球王国がどのように存在していたのかを考えよう。1609年、琉球王国は薩摩藩の島津家久<sup>しまづいえひさ</sup>(1576～1638)の軍に征服され、**薩摩藩の支配下に置かれた**。薩摩藩は、琉球において検地や刀狩を通じ石高制による農村支配を確立した。琉球は、**幕府に対して琉球国王の代替わりごとに就任を感謝する謝恩使<sup>しやおんし</sup>**、

徳川将軍の代替わりごとに奉祝する慶賀使<sup>けいがし</sup>を派遣した。一方、清に対しては独立した王国として冊封を受け、朝貢貿易を継続した。このように琉球は幕府と清の両方に対する外交体制を保った（日中両属）。

以上が江戸時代における琉球のありようである。沖縄県設置に関する記述にも字数を割けるように、必要以上に詳述するのは避けた方が好ましい。

## ②明治時代

そして、明治時代における琉球処分について述べよう。明治政府は、琉球王国を琉球藩に改め、国王の尚泰<sup>しょうたい</sup> (1843～1901) を藩王にし、国内の体制に組み込んだ。それに対して、宗主権を主張する清は強く反発してこれを認めず、日中関係は緊張した。その後、台湾において琉球漂流民殺人事件が起きた。清は「化外の民」<sup>けがいたみ</sup> が起こした事件として責任を取らないとしたため、日本は1874年に台湾に出兵した。イギリスによる調停もあり、清は日本の出兵を正当な行動と認め、賠償金を支払った。この一件で日中間の琉球帰属問題に対して有利な立場に立った政府は、両属関係を維持することを望む琉球に軍隊を派遣し、琉球藩の廃止・沖縄県の設置を断行した。以上の流れが琉球処分である。幕末から明治期にかけての近隣諸国との領土交渉は頻出テーマなので、これを機会に明治政府の南北の領土画定についても復習しておこう。

以上をまとめて解答しよう。

(久米光仁, 釈迦戸雅史)